トピック

琵琶湖周航の歌

1．歌の誕生

滋賀県民が愛してやまない「琵琶湖周航の歌」が誕生してから2017年で100年を迎えました。

かつて京都にあった旧制の第三高等学校の水上部（ボート部）には琵琶湖を数日かけて回ってくる「琵琶湖周航」の行事がありましたが、1917（大正6）年6月の周航の途中、今津の宿で部員の小口太郎が詞を発表しました。たまたま同行したクルー仲間が知っていた吉田千秋作曲の「ひつじぐさ」の曲をつけたところ、ぴったり合ったので、その夜から周航の間中、皆で合唱しました。

こうして誕生した周航の歌は、その素晴らしさから学生の間にすぐに広まっただけでなく、女学校などを中心に学外でも大勢の人に愛唱されるようになります。

2．作詞者・原曲者

作詩者である小口は長野県出身。小さい頃から仏教に対する関心が深く、周航の歌の歌詞にも「仏の御手に・・」や「・・比良も伊吹も夢のごと」「・・黄金の波に・・」など人間の一生を表現した中に無常感や浄土思想が伺えます。大学時代には世界5カ国の特許をとるなど科学者として将来を嘱望されましたが26才で亡くなっています。

原曲者の吉田は新潟県出身。幼少の頃から病弱だったため独学で音楽を中心にさまざまな分野の勉強を続けます。農業大学を中退して入院した病院のクリスチャンの院長の影響を受け音楽の中でも賛美歌にとりわけ興味を持ちます。24才で夭折するまでに作曲した作品は約200曲、その半数は賛美歌といわれ周航の歌の原曲である「ひつじぐさ」も、そうした曲の1つです。

写真T-1　当時のクルーの集合写真　（後列右端が小口。背景は当時の瀬田唐橋）

3．県民の貴重な「心の歌」

仏教的な歌詞にキリスト教の賛美歌のメロディーがつけられた「琵琶湖周航の歌」。東洋と西洋が一体となって作られたこの歌は恐らく世界でただ一つの貴重なものでしょう。

数多くの人がこの歌を歌う度に癒され、また元気づけられるのは、こうした宗教の持つ大きな力が、その一人ひとりに働きかけているとも考えられます。

小口が作詩したのも、吉田が「ひつじぐさ」を作曲したのも共に20才の時。一度も顔を合わすことのなかった2人によって奇跡のように誕生した滋賀県民の心の歌である「琵琶湖周航の歌」に誇りを持ちながら、いつまでも歌い続けていきたいものです。

写真T-2　作詞者 小口太郎の顔写真
（京都・三高時代）

写真T-3　原曲者 吉田千秋の顔写真
（東京・四中時代）

琵琶湖周航の歌

作詞　小口　太郎　原曲　吉田　千秋

1　われは湖の子　さすらいの
旅にしあれば　しみじみと
のぼる狭霧や　さざなみの
志賀の都よ　いざさらば

2　松は緑に　砂白き
雄松が里の　乙女子は
赤い椿の　森蔭に
はかない恋に　泣くとかや

3　浪のまにまに　漂えば
赤い泊火　なつかしみ
行方定めぬ　浪枕
今日は今津か　長浜か

4　瑠璃の花園　珊瑚の宮
古い伝えの　竹生島
仏の御手に　いだかれて
ねむれ乙女子　やすらけく

5　矢の根は　深く埋もれて
夏草しげき　堀のあと
古城にひとり　佇めば
比良も伊吹も　夢のごと

6　西国十番　長命寺
汚(けが)れの現世(うつしよ)　遠く去りて
黄金の波に　いざ漕がん
語れ我が友　熱き心

琵琶湖周航の歌研究家　**飯田 忠義**